

## 語りの発話選択

—— *Mondo* における動詞時称を中心に ——

武本智沙

今年度の発表では、J.M.G. Le Clezio が一九七八年に発表した短編集 *aures histories* に収められた短編 *Mondo* 『モンド』における特異な動詞時称の用いられ方に注目し、中心的な時称として使われている半過去と大過去の分析をしながら、動詞時称がテクストのなかで担う役割を検討した。

通常、フランス語の語りにおいて用いられる動詞時称は、完了相を担う単純過去（あるいは複合過去）と未完了相を担う半過去の組み合わせが中心となっている。なぜなら、両時称のアスペクト的対立が、語りという枠組みにおいても対照的な機能を果たすからである。単純過去（あるいは複合過去）が物語を進めていく上での出来事を叙述するために用いられるのに対して、半過去は単純過去や複合過去で表される出来事の状態説明などに用いられる。そのため、これらの時称が組み合わせられると、語りが立体的なものとして呈示されることになるのである。

ところが、『モンド』では、通常の物語とは異なり、あらずじを担うとされる単純過去や複合過去はごくわずかしか用いられず、半過去が圧倒的に多用されており、いわば付随的な時称である半過去と大過去のふたつの時称の組み合わせを中心に語りの世界が構築されているのである。ここでは、出来事の生起が完了アスペクトの単純過去や複合過去ではなく未完了アスペクトの半過去で

語られるので、事行が完結したものと示されず、延期されたような状態、あるいは中途半端に一時停止されているかのような状態で呈示されるのである。一般にフランス語の語りは、語り手が単純過去や複合過去で完結した出来事をひとつひとつ描写することによって、展開されていくのであって、半過去の叙述だけではいわば背景描写の連続になってしまい、「前景」となるストーリーの展開が組み立てられないのである。

この小説は、少年が町にやって来て補導された後に姿をくらますまでの数日間の物語であるが、動詞時称の用いられ方には、その物語の特異性が反映していると言える。半過去が多用されるのは、主人公の少年の習慣的行為や彼の好きだったことを描写するのに、ある状況ないし場面において繰り返されたことを呈示する機能を持つ半過去が適しているからである。そして、このような反復された行為の描写をする半過去を基調とする流れの中で現われるのが大過去である。予期せぬ出来事や人との出会いなどが挿入される場合には、「ある日」や「ある午後」という導入表現とともに大過去が用いられるのである。つまり、『モンド』に出てくる大過去には、用法として二種類あるととらえられる。ひとつは、ある過去の時点においてすでに完了していた行為やその結果としての状態、あるいは動作の継続・反復などを表す一般的な用法のもの、もうひとつは予期せぬ出来事を導入するときに、導入表現の副詞とともに現れるものである。後者の場合の大過去は、話を進めるための出来事を語る役割を果たしており、半過去で述べられている事行はそれらの背景描写になっている。それはインプスが述べているように、「大過去が表す事柄が、他の過去の事柄との関係で直前のことを基準にする場合、先行性という概念が

前面に出て来ることになる」(P. IMBS: *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck, Paris, 1960, p. 125) である。要するに、半過去と大過去の併用によって物語が立体的になるのは、大過去のアスペクト的機能(完了相)が強調されることによってもたらされる効果によるのである。

しかしながら、新しい出来事を述べるときに用いられる語りの挿入が大過去によって呈示されるのは最初のうちだけで、いつの間にか時称の移行が起こる。出来事を継起順に述べていた大過去が消えて、継起する出来事であるにもかかわらず半過去で表されるようになり、半過去のみが描写が続いていくのである。このような連続的な半過去の描写の場面で現われる大過去は、時間的に前のことを表すときのみ用いられている。したがって、『モンド』における半過去には、背景描写をするものと、物語の展開にかかわる行為を描写するもの、つまり物語りのあら筋を担う役割を果たしているものが存在しているということになる。時間的にストーリーを展開させない半過去でほとんど書かれたテキストでは、時間的に後のことを意味する *puis* 「それから」という副詞の多用が、物語内の時間経過を明示する役割を担っているのだと考えられる。

言うまでもなく、物語の中心的ストーリーを担っているような半過去の効果は、通常あらずしを担う単純過去(あるいは複合過去)によってもたらされる効果とは明らかに異なる。単純過去と半過去の対立によってもたらされる「浮き彫り付与」(H. WEINRICH: *Le temps*, Seuil, 1973, pp. 112-117 [trad. fr de Weinich, 1964]) の効果が、遠近法による空間的なものだとする<sup>24</sup> 『モンド』のなかでの半過去と大過去の対立は、時間差に

よって「浮き彫り付与」の効果を生じさせるのである。それは、背景を担うはずの半過去が、大過去との関連で時間的に前に押し込まれ、自ずと浮かび上がらせられることになるからである。そもそもこのような効果が生じるのは、エピソードを挿入するための導入標識を呈示して事件が起こることを期待させながらも、「前景」を述べるための時称は現れず、いつまでも「後景」を述べるための時称で語られていくので、結果的に大過去で表されている事行が時間的に後退し、半過去で表されている事行が前面に押し出されていくからだと考えられる。

今回の発表では、半過去と大過去にのみ焦点をあてて考察したが、テキストにおける発話選択と動詞時称に関する包括的分析については別の機会に論じたい。